

平成30年度特別支援教育に関する実践研究充実事業  
 (次期学習指導要領に向けた実践研究)  
 成果報告書 (概要)

受託団体名
鳥取県

## 1 指定校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名 (ふりがなを付すこと)
鳥取県	公	聴覚障害	鳥取県立鳥取聾学校 (とっとりけんりつとっとりろうがっこう)
鳥取県	公	聴覚障害	鳥取県立鳥取聾学校ひまわり分校 (とっとりけんりつとっとりろうがっこうひまわりぶんこう)

## 2. 事業の実績

## (1) 事業の実施日程

実施時期	実施内容	評価事項
平成30年4月	全体研究会	
平成30年5月	個々の実態把握と共通理解 職員研修 (自立活動の流れ図の活用)	多面的な実態把握 横断的な指導
平成30年6月	「鳥聾スタンダード」定期チェック	
平成30年8月	職員研修 (授業改善・新学習指導要領) 職員研修 (聴覚障がい児の思考力)	
平成30年9月	授業研究会 (幼稚部)	授業の工夫
平成30年10月	「鳥聾スタンダード」定期チェック	
平成30年11月	授業研究会 (幼・小・中・高) 中国地区ろう教育研究会 (小・中学部 授業公開) 中間報告 (ひまわり分校)	授業の工夫 授業の工夫 進捗確認と改善
平成30年12月	授業研究会 (支援部) 中間報告 (本校)	授業の工夫 進捗確認と改善
平成31年 1月	職員研修 (主体的・対話的で深い学び)	授業の工夫
平成31年 2月	研究報告会 (本校・ひまわり分校)	成果と課題

## (2) 研究課題

多様化する幼児児童生徒の教育的ニーズに応えるために、実態把握をもとにした指導の工夫改善により、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を図る。

### (3) 研究の概要

本研究は以下の3つの柱で進めた。

- ア 個々の実態の多面的な整理と分析
- イ 自立活動や教科等を横断的に関連させた指導の工夫
- ウ 習得した知識及び技能が生きて働く授業の工夫

#### ア 個々の実態の多面的な整理と分析

個々の実態を多面的に整理・分析するための視点をさらに充実させ、学習上又は生活上の困難の背景にある要因や関連性等について分析した内容を授業担当者と共通理解したり、各教科等の学習に生かしたりした。

#### イ 自立活動や教科等を横断的に関連させた指導の工夫

自立活動における実態把握から具体的な指導内容・指導場面を設定するまでの流れの図に「⑨指導場面を設定（自立活動や教科等を横断的に関連させた指導）」を追加し、誰がどの場面で何を指導するのかを明確にすることで、教科の時間における自立活動の指導の充実を図った。

#### ウ 習得した知識及び技能が生きて働く授業の工夫

##### (ア) 「鳥唄（ひまわり）スタンダード」を用いた授業づくりに関する自己評価（教員用）

聴覚障がいのある幼児児童生徒の共通した実態を踏まえた授業づくりの基本的な留意事項をまとめた「鳥唄（ひまわり）スタンダード」を、年度初めに全教職員で共有するとともに、新たに定期的な自己評価に活用することで授業づくりの基礎的環境整備を図った。

##### (イ) 「思考をくすぐる6つの活動」を取り入れた授業の工夫

各年齢段階でめざす幼児児童生徒の思考する姿を明確にし、学校・学部レベルで共通理解した。また、幼児児童生徒の思考を促す6つの活動を掲げ、教科の特性や本時のねらいに即して適切に学習活動を設定するとともに、学習指導案についても幼児児童生徒の思考を視点にした様式に改め授業実践することで、短絡的・一面的になりがちな思考から習得した知識及び技能を働かせる思考への転換を図った。

##### (ウ) PDCAサイクルの授業づくり

当該幼児児童生徒の担任や教科担当など関係する教員で実態把握や教材研究を行い、単元や本時のねらいに迫る単元構成や学習活動の設定、学習過程で予測される反応やつまづきを踏まえた発問、教材・教具や板書等の検討を行い、授業実践と改善を繰り返した。

##### (エ) 自己評価表を用いた振り返り活動の充実

個々の実態に応じた自己評価表を用いて授業における振り返り活動を充実させることにより生徒の学びの深まりを図った。

#### (4) 研究の成果

##### ア 個々の実態の多面的な整理と分析

実態把握をもとに授業を組み立てるという流れが定着し、多様化する実態に対応する組織的な取組ができてきた。諸検査等の客観的データや日々の観察、複数の教員による見取りにより、多面的で妥当性のある実態把握ができてきた。弱みや課題のみを把握するのではなく、強みを把握し指導・支援のヒントとすることは、幼児児童生徒の意欲や主体性を引き出すのに有効である。

##### イ 自立活動や教科等を横断的に関連させた指導の工夫

重点的な指導目標や共通の指導・支援を教科の枠を越えて共通理解することにより、組織的な指導・支援ができてきた。自立活動の流れ図に付け加えた項目に、誰がどの指導場面で、何を指導するかを明確に記載することで、特に教科の時間における自立活動の指導が有機的に行われるようになってきた。

##### ウ 習得した知識及び技能が生きて働く授業の工夫

「鳥豊・ひまわり分校スタンダード」を用いて聴覚障がい児に対する授業の工夫・配慮事項を共通理解するだけでなく、教員の自己評価や授業参観の視点として活用することで、鳥取聾学校の専門性の維持に役立てるツールとなった。

思考を促す学習活動や発問を工夫することで、幼児児童生徒が自ら気づき、考える姿が増えたり、学習の振り返りの内容が充実したりしてきた。

#### (5) 課題と今後の方策

##### ア 個々の実態の多面的な整理と分析

幼児児童生徒の多様化する実態を多面的に把握するだけでなく、把握した内容を効果的に学習につなげるための方法について検討する必要がある。

##### イ 自立活動や教科等を横断的に関連させた指導の工夫

実態把握から導いた重点的な指導目標や指導・支援の方法について、横断的に関連付けるための方法や校内連携の在り方について検討する必要がある。

##### ウ 習得した知識及び技能が生きて働く授業の工夫

思考を促す学習活動や発問の工夫について、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」の視点からとらえ直す必要がある。

以上のア～ウについて、客観的な評価の観点及び評価方法を定めて進めていくようにする。

※鳥取県においては、法令及び条例・医学用語・固有の名称等の表記を除き、障害を「障がい」と表記